

## 新宮町立花口区登山道のシーケンス景観とその評価

九州産業大学 学生会員 ○末次祐貴 藤井祐輔  
九州産業大学 正会員 山下三平

### 1. はじめに

福岡市東区に隣接する福岡県糟屋郡新宮町は近年、JR新宮中央駅を中心とした西部地域で人口の増加が著しい。一方、国道3号線の東側に位置する東部地域は山や田畑を含む自然豊かな地域であるが、人口が減少し、空き家・空き地が目立つようになっている。東部地域の立花口区では2016年から地元の団体による地域活性化に向けた取り組みが始まっているが、道半ばである。地域資源を活かしつつ、この取り組みを継続していく必要がある。とくに、登山客で賑わう立花山への登山道は、この地域のまちなみを縦断するため、活用が期待される。前報<sup>1)</sup>では、アイマークレコーダによる登山道利用者の注視に関する調査を行った。その結果、老朽化した建築物の対策の検討を含めた登山道の整備が課題と示唆された。

そこで本報ではこの結果を踏まえ、新たに登山道からの眺めを被験者に撮影してもらい、併せてその動機を尋ねる。こうして登山道のシーケンス景観の特徴と評価を明らかにすることを目的とする。

### 2. 対象地域について

新宮町は、総面積 18.9 km<sup>2</sup>で南西は福岡市、北は古賀市、南東は久山町の3市町に隣接している。本研究では新宮町の国道3号線の東側に位置する東部地域の立花口区を扱う(図1)。立花口区には標高367mの立花山があり、年間約3万人の登山客が訪れている。また、この地区には梅岳寺や独鈷寺、六所宮などの重要な史跡があり、多くの古民家が建ち並んでいる。



図1 新宮町と立花口区

### 3. 研究方法

#### (1) 調査方法

本研究では、登山者の「注視データ」と「撮影データ」の2つを用いる。

「注視データ」は、2016年10月から12月に実施したアイマークレコーダによる調査データである<sup>1)</sup>。「撮影データ」は、2017年10月から11月に実施した調査で、被験者にデジタルカメラを渡し、撮影した対象物のコメントを用紙に記入してもらった。「注視データ」では撮影の理由と評価を把握できなかったため、この「撮影データ」をもとに対象物の選択の意図と評価を調べる。一方、「注視データ」からシーケンスを把握するために、等間隔の距離(10m)ごとの注視の様子を新たに分析する。

#### (2) 分析方法

「注視データ」は、注視点が明確に撮れている10名の有効データを用いて、全長670mの登山道の調査ルートを10mごとに区切り、10mおきの地点を被験者が通った時、注視の軌跡が表示されている場所にどのような対象物があったかを分析する。前報<sup>1)</sup>では注視点の数に着目したが、今回は注視の軌跡すなわちシーケンスに着目する。

「撮影データ」は、大学生26名(男13:女13)により得た全909枚の写真をもとに、得られた写真から主対象を分類し、さらに7種に包括し分類した(表1)。この分類には3名の分析者が当たり、協議の上で決定した。また、コメントから評価を「肯定」「否定」「中立」「評価なし」に4分類した。

さらに、「注視データ」の10mおきの注視対象物の中で注視頻度が高い対象物を「撮影データ」からピックアップし評価を分析した。

表1 主対象の種類とその包括分類

包括分類	居住(366)	自然(184)	移動・誘導(215)	風景(46)	共有の場所(44)	聖性(34)	その他(20)
主対象	建物(319)	花(36)	サイン(101)	風景(25)	公民館(12)	梅岳寺(25)	電線(3)
	塀(27)	木(33)	道(87)	まちなみ(21)	排水設備(11)	石碑(9)	異の跡(3)
	庭(9)	山(23)	ミラー(18)		工事現場(6)		スピーカー(2)
	門(2)	生き物(22)	階段(3)		消防設備(5)		羊(2)
	車(2)	果実(18)	ガードパイプ(2)		消防センター(4)		人(2)
	トイレ(1)	竹(13)	手すり(2)		旗(3)		ろうそく(1)
	ソーラーパネル(1)	煙(9)	反射板(1)		植木鉢(3)		プレハブ(1)
	煙突(1)	華(8)	カラコーン(1)				しご(1)
	ゴミ(1)	葉(7)					扇風機(1)
	置物(1)	空き地(5)					おもちゃ(1)
	換気口(1)	水路(3)					落書き(1)
	欄(1)	こけ(3)					ブルーシート(1)
		荒地(2)					コード(1)
		土(1)					
		根(1)					

4. 結果

(1) 「注視データ」の10mおきの注視対象物

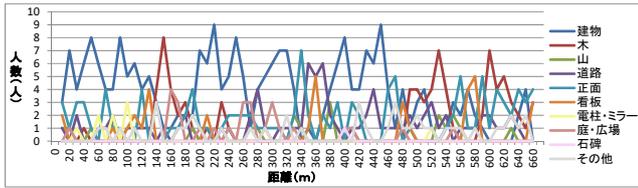


図2 10mおきの注視対象物 (上り)

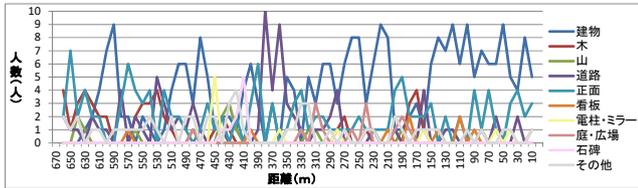


図3 10mおきの注視対象物 (下り)

「注視データ」の10mおきの注視対象物を種類別に分類すると図2(上り)と図3(下り)のようになる。

注視人数が8人以上ある距離をみていくと、全20点のうち「建物」が往復合わせて17地点ある。その中でも開始地点(図4)から130m地点までの間に6地点ある。この間は登山道が直線で道沿いにこの地区の特徴的な建物で門の両側が長屋になっている「長屋門」が建ち並んでいるからと考えられる。上り450m地点の建物も「長屋門」である。220m地点では上り下りともに8人を超えている。この地点には特徴的な「蔵」がある。250m地点も上り下りともに8人を超えており、この地点には「古民家」が建っている。400m地点にはこの登山道沿いで唯一の寺院である「梅岳寺」がある。590m地点をみると、下りで建物の注視が9人になっている。この地点は曲り角になっており、登山道を下る時に正面に「新築」の建物が見えるからであると考えられる。

「建物」以外は、上り150m地点で「木」を8人が注視している。これは上り方面で右カーブとなっている地点で、正面に木が連なり壁のように植えられているからと考えられる。下りの380m、360m地点は「道路」の注視が8人以上である。これは多くの車が行き交う県道540号山田新宮線との交差点があるためである。



図4 立花口登山道の調査ルートとその周辺

(2) 注視頻度の高い対象物の評価

注視頻度の高かった対象物についての「撮影データ」の評価の割合を示したものが図5である。

否定のコメントがないのが「長屋門」と「木」である。「長屋門」は、肯定が41%あり「とても雰囲気が良い」「立派な長屋門で目にとまった」といったコメントが見られる。また、「古民家」は肯定が50%となっていて他の7項目の中で最も肯定の割合が高く、「渋くていいなと思った」といったコメントが見られる。

一方、否定が肯定を上回っているのが、「県道との交差点」であり、7項目の中で一番否定の割合が高い29%である。「横断歩道もなくて、とてもこわい印象だった」といったコメントが見られる。ついで、否定が高かったのが「蔵」の18%であり、「ちょっと壊れそうで怖い」といったコメントが見られる。

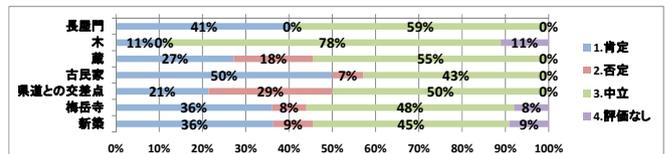


図5 注視頻度が高い対象物の評価の割合

5. まとめ

本研究では、景観の注視対象と評価について新宮町立花口区登山道で調査を実施した。その結果、以下のことが分かった。

- 1) 注視頻度は大門口から130mの直線区間の建物がとくに高く、重要な区間である。また、曲り角など目立つ位置にある事物も注視されやすい。
- 2) 長屋門など昔の雰囲気を味わえる建物の評価が高い。しかし、老朽化した建物は評価が低い。
- 3) 県道との交差点は評価が低く、歩行者の行動を考慮した改善をする必要がある。

このように大門口から最初の曲り角(130m)までには長屋門が連なり、趣のある景観になっているため、今後も維持に配慮が必要である。一方、登山道のシーケンスを分断する交差点や、目立つ位置にある事物は改善が必要であり、登山道全体として昔ながらの雰囲気を楽しめるようにすべきだろう。

謝辞: 本研究は新宮町からの受託研究「東部地域における地域資源活用調査」(代表者: 山下三平)による。

<参考文献>

- 1) 末次祐貴・山下三平: アイマークレコーダを用いた新宮町立花口区の登山道の注視点調査, 土木学会西部支部研究発表会, pp561~562, 2017.